みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Pronouns in the S□jarah M□layu or Malay Annals

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崎山, 理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004467

『マライ編年史』の代名詞
——KWIC にもとづく比較研究——

崎　山　　理*

Pronouns in the Sĕjarah Mĕlayu or Malay Annals

Osamu SAKIYAMA

The SM is the first and the finest Malay literary work of the early 17th century. The author is not known, but is said to be not only a pundit but literary artist by virtue of its flowing and elegant style. Of the variant texts that have been published, the Abdullah text is considered the "standard" one.

This paper attempts to clarify the use and the system of the pronouns found in the SM mainly on the basis of the Abdullah text which is re-arranged in the form of KWIC at the National Museum of Ethnology. The grand total of KWIC is 6054 items.

Contrary to Brown's impression [1970: xiii], that in the SM there is no uniformity in the use of the pronouns for the first and second persons, it is shown in this paper that the use of pronouns is consistent, though the language of the work contains a greater variety of personal pronouns, including diverted kin terms, than modern Malaysian and Indonesian.

The proper use of the speaker *sahaya* "by a person of low rank to one of high rank" and *aku* "vice versa", the form of polite address to either man or woman *tuan*, the third person *ia* "nominative case", and *dia* "oblique case", etc., is not strictly observed at the present time. There were also kin terms ending in *-nda* used for both "term of address" and "term of reference" which are scarcely encounterd today.

Winstedt erred in saying that the ending *-nda* means "honorific" [1972: 111], because there is also the use of the speaker: *senda* (*sahaya*+*-nda*). This *-nda* form should be defined as "polite suffix" indicating reverence and humility.

* 国立民族学博物館第5研究部

A primary factor in characterizing Malayan polite expressions is that they depend not only on the human relationship but on the context of the utterance. Therefore, if the situation requires, a parent is able to call or refer to his own child with the polite form, *putěra* "son" or *putěri* "daughter" rather than the neutral *anak*.

The serial adverbs of place such as *sini*, *situ* and *sana*, derived from the demonstratives *ini*, *itu* (and unattested **ana*), are generally said to be equivalent to the personal pronouns *aku*; *sahaya*, *ěngkau*; *tuan* and *ia*; *dia* respectively, contrasting with here, there and over there in English or *ko-*, *so-* and *a-* in Japanese. But unlike English or Japanese, Malay is assigned to the speaker-hearer type [吉田　1981], that is, *sini* means "near the speaker", *situ* "near the hearer" and *sana* "far from both". In the SM *situ* occurs only once. This fact reveals that the literary style of the SM is not narrative, but descriptive.

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 代名詞
Ⅲ. 人称代名詞
1. 碑文の人称代名詞
2. 編年史の人称代名詞
3. 転用された人称代名詞
(i) 一人称
(ii) 二人称
(iii) 親族名称
4. 親族名称の一・二人称的用法
(i) 対称詞
(ii) 自称詞
5. 称号・人名・人称詞の用法
(i) 称号
(ii) 人名
(iii) 人称詞
Ⅳ. 指示代名詞
1. 様態の副詞
2. 場所の副詞
Ⅴ. 関係代名詞
Ⅵ. おわりに

Ⅰ. はじめに

マライ語は民族の興亡，変遷のはげしい東南アジアにおいて，すでに7世紀からの資料をもつかなり息の長い言語である。しかし，マライ語が交易のための共通語 (lingua franca) としての歴史のなかで残した資料は，けっして多くない。本格的な書記言語として登場するのは17世紀にはいってからであり，その嚆矢としてあらわれた『マライ編年史』(Sějarah Mělayu) は，現在においても歴史的文学的民族学的資料としての価値を維持している。『編年史』の成立年代は1612年とするのが有力で [Winstedt 1969:158]，以後かなりの写本がつくられた。文献学的研究としては戦前の西村朝日

太郎の労作 [1942] があるが，その後，内外においてまだ本格的な本文批評はあらわれていない。現在，流布している写本には Abdullah 本 [1952] と Shellabear 本 [1975] とがあり，西村氏は，前者を旧シンガポール本，後者を新シンガポール本と名づけ，前者は標準的であるが，後者は史実の歪曲，故意の削除などがあって学問的価値が減殺されている [西村　1942: 27] という。全体として Shellabear 本は Abdullah 本よりいくぶん長い。さらに Winstedt 本 [1938] をもとにした Brown による英訳がある [1970]。Raffles の稿本によった Winstedt 本は『編年史』の母胎 (predecessors) になったものと考えられているが [Brown　1970: xxvi]，さきの二本とくらべて内容的な違いがはなはだしい。『編年史』の校訂のための研究がまたれるゆえんである。『編年史』の神話的研究は最近おおやけにされたが [富沢　1981]，マライ語史の資料としてもたいへん重要である。現代のマライ語（公用語としてはマライシア語，インドネシア語といわれる）と8世紀以降の碑文のマライ語とをつなぐことばとして，言語的特徴としてはおおいに現代語寄りであるけれども，今後，『編年史』のマライ語の共時的研究がおこなわれる必要があり，本報告はその目的のための一環となるものである。『編年史』の簡単な資料的背景は以上のようであるが，国立民族学博物館では Abdullah 本と Shellabear 本とをコンピューターに研究資料として入力し，その KWIC（文脈付語彙検索表）を作成した。以下で論じるのは Abdullah 本の KWIC にもとづき，また必要におうじ S.（=Shellabear 本）W.（=Winstedt 本）と注記する。また例文のあとの数字（123—12）はテキスト 123 頁の12行目をあらわす。なお Abdullah 本の KWIC された項目別の総数は6054語である。表記法は1972年にきめられた統一方式にあらためる。ただし，本論ではとくに表記されない [ə] にたいし ĕ と書く。

II. 代　名　詞

代名詞という術語をことばどおりに受けとれば，名詞にかわる品詞ということで，現代語の文法でもたいへん誤った観念をあたえることが指摘されている[フレイ　1973: 72]。このような定義は，紀元前のギリシアの文法学 antōnymía「代理の語詞」から継承されているわけであるが，ここにふくめられる代名詞の種類については，かならずしも一定してはおらず，個別的に限定されたものを代理するという立場のひとは，現代の疑問代名詞，不定代名詞はこれにいれず，また，代名詞に指示的と関係的の二つの機能をみとめたのはローマ時代にはいってからの Priscianus（西暦6世紀）であ

った [泉井　1967: 43]。代名詞という術語をさけて Brunot の提案した「代理辞」(représentant) などと呼ぶこともできようが [フレイ　1973: 72], 本論ではその性格, 用法が不確定なことをみとめたうえで代名詞という術語をあえてもちいることとし, 人称代名詞, 指示代名詞, 関係代名詞, 疑問代名詞という, これも伝統的な術語によって説明をこころみることにする。これら各種の代名詞のあいだには形態のうえできわめて強い相関性がみとめられる。いっぽう, 代名詞に共通する機能として話し手と事柄との関係概念を話し手の立場において表現するもの [時枝　1978: 69] という定義 (ただし日本語についてであるから関係代名詞はこの定義にはふくまれていない) の妥当性について考えてみよう。フランスの碩学 Benveniste は, 人称代名詞, 指示詞 (démonstratifs) を言語的個物 (individus linguistiques) と呼ぶが, それはただ特定の概念のみをあらわす名詞とつねに対立していて, 人, 時間, 場所などが問題となるときに, ただ個々の場合におうじてつねに異なる個物をあらわすことしかできないからである [Benveniste　1974: 83]。代名詞の用法は, 話し手と事柄との関係のみならず聞き手もくわわった場面での話し手の総合的な認識, 判断によって決定される。話し手だけを問題としたのではうまく説明できない現象も多い。ひとつの例として, よく引用される「(医者の触診をうけて自分の体の)ああそこが痛むのです」(マライ語もおなじ。*situ*), また目下のものにむかって自分のことを「おじさん」(マライ語もおなじ。*bapak*) のような表現が起こるのは, 聞き手の存在を前提としてはじめてその説明が可能になる。

III. 人称代名詞

1. 碑文の人称代名詞

碑文のマライ語にあらわれる人称代名詞は表1のようになる [Coedès　1930: Casparis　1956]。右側の接尾形は所有代名詞としての働きをする。空欄は資料上の欠如をしめすが, 碑文マライ語と編年史マライ語・現代語とのもっとも大きな相違は, kita が後者では一人称複数 (包括形) でしかもちいられないのに前者では二人称であること, また -mamu はその後のマライ語史のなかでは消失して地方語にしか残らないことである。たとえば, 古ジャワ語の一人称単数および一人称複数 (除外形) kami にたいする接尾形 -mami, スラウェシ島のバレエ語の一人称複数 (除外形) kami にたいする接尾形 -mami の関係にみられる。碑文の kita と kamu は, kamu がもともと二人称をあらわしたに違いなく, kita は転用であることがあきらかである。代名

表 1

	単	複	単	複
1.	aku		–ku	
2.		kita kamu		–ta –mamu
3.	iya, ya		–nya	

(碑文上の a, ā のような長短の区別は短に統一した)

詞の不安定性がここにあらわれているが，日本語の自称詞「われ，わいら」が対称詞としてもちいられる方言もかなりあることとにている。二人称としての kita は，超自然力，神性にたいしてつかわれる丁寧な (polite) 形式であった [Casparis 1956: 21]。このような転用をどのように解すべきか。話し手と聞き手によって成立する kita の，聞き手のほうに身を置いてできあがった表現がこれであることになろう。そしてフランス語でも tu, vous のかわりに nous がもちいられることがある [山崎 1956: 113–114]。古ジャワ語の kita にも碑文マライ語とおなじ現象がある。

Bhaṭāra hyang *kita* kabeh, kĕmitāku rakṣatāku!「なんじら神々すべてがわれを見守りたまえ」[Fokker 1938: 27]

要するに最終的にはコンテキストのなかで一人称か二人称かの判断をせざるをえないような例が多い。

現代語での使用はまれであるが，編年史ではしきりにもちいられた -nda という前接辞 (enclitic) がある。これを三人称代名詞とみることはできない。語源的に祖語形 *ḍa- という尊敬の接辞(マライ語 *da*tuk; ジャワ語 *ra*tu「家長」; タガログ語 *dá*to?「酋長」などの da-, ra- はそれを継承する)の存在をここにみとめるのは Coedès [1930: 69] であるが，かつてのまだ語根の状態にあった *ḍa からつくられたと考えるほうが自然である。-ṇ- はこのような関係詞 (relatives) とともにあらわれる調整鼻音 (passe-partout nasal) [Gonda 1943: 522] とみてよい。ただし，このような -ṇḍa の語源説にたいして Poedjawijatna／Zoetmulder [1964: 110] は懐疑的である。-ṇḍa は親族名称について尊敬をあらわすが，編年史では -nda となりその機能も尊敬のみならず謙譲をもあらわすようになる。なお，碑文マライ語以降はすたれてしまった ḍapunta「君主」という称号にあらわれる -nta を一人称複数接尾形(包括形)とみなす考えがある [Kähler 1965: 25]。*ḍa はさきほどの接辞，*pu「祖先，孫」も語根とみなしうるから(これはマライ語，ジャワ語 ĕm*pu*「職人への称号」; タガロ

グ語 im*pó*「祖父母」, a*pó*「孫」; フィジ語 tum*bu*tum*bu*「祖先」のような派生語をうみだしている), 全体として ḍapunta を「わが偉大なる支配者」(unser Herr) と解釈することも可能ではあろう。ただし -nta を -ṇḍa といっしょにする [Coedès 1930: 69] ようでははなしにならないが, -nta の出現例はこの例のみであり, また kita の接尾形は -ta であるのにこの場合は -nta となる理由がよくわからない。

編年史マライ語には存在しなかったが, 現代語に突然あらわれたかの感がある anda という二人称代名詞がある。これは対象間の落差を無視して中性的にもちいられるという特色をもつ。話しことばであらわれることはすくないがもっぱら広告文などにもちいられる。この anda は -nda に由来する [Macdonald／Dardjowidjojo 1967: 122] というのはたしかであろう。前接辞が独立したのである。

碑文にあらわれる人称代名詞の特異な例として前置詞と融合した形がある。一人称単数 diyaku; dyaku, 三人称単数 diya; dya がそれで, 場所の前置詞 di が人称代名詞についている。編年史, 現代語では daku, dia となり二人称単数 dikau とともにひとそろいになる。この用法は初期には主格以外, つまり斜格的にもちいられ, 日本語でいえば「を, で, から, に, へ」さらに古い用法では「の」のような働きをした。

anukūla yaṃ graha nakṣatra parāvis *diya*,「惑星星座がことごとく彼等にとって好ましかれ」[Coedès 1930: 40]

dia は現在, 主語として ia とともにとくに区別なくもちいられる。そのような使用上の混乱はすでに編年史においてはじまっていた。

2. 編年史の人称代名詞

表 2 には編年史にあらわれる人称代名詞のうち, 語源的にも他の名詞などからの転用でない形をかかげてある。ただし, měreka (mareka) のみはマレイ語にのみ孤立的にあらわれる形で, 語源もまったくあきらかでない。左側は接頭形で動詞が他動詞となることができるときこの形をもちいる。右側は所有のほか目的形として。( )は

表 2

	単	複	単	複	単	複
1.	aku (ku–)	kami (除) kita (包)	aku	kami (除) kita (包)	aku (–ku)	kami (除) kita (包)
2.	ĕngkau (kau–)	kamu	ĕngkau	kamu	ĕngkau	kamu (–mu)
3.	di– dia		ia dia	měreka	dia –nya	měreka

その短縮形。また三人称には特殊な事情があって di- は非限定的な一般人称となり，di——nya と -nya と組みあわせれば限定的となる。

maka *di*suruh běndahara těbus, maka *di*běrikan pada anak yang lain;「(その象を) 宰相が請け出してくるよう命じられた。そして (その象は) 彼の別の子供に与えられた」 (290-10)

という例で「与えた」のは宰相ではなくだれか別の人である。いっぽう，di- の使用は婉曲的表現ともなり，高位高官の人を直接に主語として立てず di- によって置きかえることによって尊敬をあらわすこともできる。*di*suruh はその例である。

maka *di*makan běndahava, *di*kunyah-kunyah*nya*, *di*běrikan*nya* kěpada cicit-nya itu;「(キンマを) 宰相は噛んで砕いて曾孫に与えられた」 (288-24)

ここで di——nya がもちいられている理由は明瞭である。dia は，現代語と用法がすこし異なっていた。dia の頻度数は141回(および強調の前接辞 -lah のついた1例)であるが，その用法は，動詞の目的語，前置詞とともに，そして属格的にもちいられた例のみで主語としての例はまったくない。ただし dia は主題 (topic) として立つことができた。

anak harimau diajarnya makan daging, *dia* kělak *di*tangkap*nya*.「虎の子は肉を食うことを教えられるが，彼はやがて人に捕まるのである」 (204-28)

このような dia の例はわずかに1例見出されるが，dia および daku を強調的代名詞 (emphatische Pronomina) と名づけて「彼についていえば，私についていえば」を意味した [KÄHLER 1965: 49] という説明にも dia の特徴があらわされている。編年史マライ語では三人称代名詞として主語となりうるのは，ia, měreka のみであった。ただし，

tiada juga tun Ali Hati mau hidup, minta bunuh *ia*.「死を願って Ali Hati 殿は殺してくれと請うた」 (305-20)

のような例で ia は，目的語としてここにあるかにみえるが，

maka sěmbah tun Ali Hati: Jikalau ada karunia, patik itu minta bunuh juga,「Ali Hati 殿は敬していわく，慈悲あれば殺し給え」 (305-16)

の文からもわかるように (juga はたんに強調の副詞)，ia は文法的に必須とされる要素ではない。これは，マライ語では西欧諸語と異なり動詞の他動詞性が語そのものの意味によってきまるのではなく，接頭辞 mě- (または měmpěr-) をつけることによって他動詞化されるという理由にもとづく。bunuh「殺す」は意味的に考えれば他動詞的であって目的語を必要とするかにみえるが，マライ語では伝統的にこのような

文法的特徴を維持してきて，それは編年史においても例外ではない。

karĕna aku tiada mau mĕmbunuh *dia*.「私は彼を殺したくない」 (305-13)

では，mĕmbunuh によって目的語は必須であり，そのために *dia* があらわれている。minta bunuh ia の ia は，いわば中ぶらりである。あえて訳せば「殺せと請うた，彼は」となろう。したがって ia も主題にはなることができる。マライ語は歴史的にみても「主語・主題卓越型言語」(Subject-Topic-Prominent Language) である。マライ語を印欧諸語，フィノ・ウグール諸語などとおなじように「主語卓越型言語」(Subject-Prominent Languages) とみなす [Li／Thompson 1976] のは誤解である。

現代語では *Dia* pĕrgi.「彼は行く」，Ayam itu *dia* tangkap.「その鶏は彼が捕らえた」，*Dia* tangkap.「(それは)彼が捕らえた」のような dia の使いかたは一般的であるが，これは編年史以後の新しい傾向ということになる。また dia は目的語となったとき，現代語では -nya と書かれる場合が圧倒的に多い。しかし編年史では，

Maka baginda pun tĕrlalu sukacita mĕnĕngar*nya*;「陛下はそれを（そのニュースを）聞いてたいそう喜ばれた」 (142-01)

のような目的語としての -nya は，この文もふくめわずか3例にしかすぎない。-nya の内容は無生物・生物のどちらでもよい。

jikalau dĕmikian orang itu, sĕri Maharajakah yang mĕmbunuh*nya*?「そうだとしたら，その人たちを，sĕri Maharaja が彼等を殺したのか」 (189-08)

三人称についていえば，かつてのia（主格）：dia（斜格）という関係がうすれ，dia も主題・主格的にもちいられるようになった結果，dia の斜格的機能を補うように -nya の使用がおうせいになってきたといえよう。編年史はその過程を反映しているのである。

単数・複数に関して三人称についてみると，現代語で考えられているように，かならずしも単数・複数間の区別が明確であったとはいえない。

hĕndaklah tuanhamba hantarkan *ia* kĕ dunia kĕpada hamba,「あなたが彼等を（三人の子供たちを）地上へお送りくださるよう」 (019-06)

また，二人称にたいしては sĕkalian, sĕmua「すべて」をつけて複数であることを明示する。

Maka titah baginda pada sĕgala mĕreka itu: *Ĕngkau sĕmua* jangan syak hati;「陛下は彼等すべてに，おまえたち疑ってはいけないと仰せられた」 (304-19)

Maka titah sultan Mahmud: Jangan *kamu sĕmua* marah,「Mahmud 侯は，

おまえたち怒ってはいけないと仰せられた」　(211-19)

ĕngkau (103回) と kamu (69回) とは，明瞭に単数・複数という対立をしているのではなく，kamu が単数にももちいられることがある。しかしその際の ĕngkau と kamu との用法上の差異はあきらかでない。ĕngkau と kamu とは方言によってどちらかがこのまれることもある。ĕngkau も kamu ももともとは目上から目下にあるいは親しいものどうしのあいだでもちいられるというインフォーマルな代名詞であった。敬語的表現のためにはあとに述べる称号，親族名称をもちいる。現代語では ĕngkau, kamu は不作法なふくみをもち，それにかえて saudara がもちいられるが，saudara (←サンスクリット sodara-「同腹の」) は編年史にもあらわれるとはいえ，それはまだ「兄弟姉妹」を意味していて現代語のように二人称代名詞としての用法はない。

kita (包括形) と kami (除外形) についてはその複数性にとくに問題はないが，kita が最高位にあるものによって単数のようにもちいられることがある。西欧諸語にも「威厳の nous」(nous de dignité) のような用法があるが，それと共通する現象である。また，現代のジャワ人のもちいるインドネシア語では，kita と kami の機能が逆になることがある [Zain 1954: 55]。

jikalau *kita* mati, bahwa anak *kita* si Muhammad inilah rajakan oleh bĕndahara akan ganti *kita*.「もし私が斃れるようなことになれば宰相よ，わが子 Muhammad を私の代わりに王として立ててもらいたい」　(203-16)

なお，kula (5回); manira (3回)「一人称単数」, andika (2回); pakanira (1回); sampean (1回)「二人称」のようなジャワ語が登場するが，このような代名詞によって，ジャワ人であることの文体的効果を期そうとこころみたのである。

3. 転用された人称代名詞

マライ語はアジアの言語の例にもれず，人称代名詞が多く，したがってその使いわけに注意しなければならない言語である。そしてその人称代名詞には普通名詞に由来するものも多い。編年史にはつぎのような代名詞がある。

(i) 一人称

一人称 (原則的に単数) としては，sahaya, hamba, beta, patik がある。

sahaya は現代語では saya となるが，編年史で saya は1例のみ，あとはすべて sahaya (60回) となっている。サンスクリット sahāya-「伴(とも)，連(つ)れ」に由来し編年史の音形がもとの形に近い。現代語では saya は aku よりもより中立的共通的にもちい

られている。いっぽう aku は文語的であり，またその使用者のあいだには親密さがみとめられる [DARDJOWIDJOJO 1978: 37]。編年史では上位から下位にたいしては aku が一般的にもちいられるが，sahaya は，

karĕna arti "sahaya" itu kĕpada bahasa Mĕlayu "hamba",「sahaya の意味はマライ語で召し使いということで」 (143-04)

のように，共時的にも語源意識がまだ残っていたと考えられ（サンスクリットもいっそう古いもとの意味は「奴隷」ということ [GONDA 1973: 381]），したがって目上にたいする謙譲的用法として使用された。ドイツ語の一人称の古い言いかた，meine Wenigkeit「いやしいもの＝不肖」とにている。しかし，hamba という一人称もあった。このほうも古ジャワ語 hamba; アチェ語 hamba「奴隷」などとおなじ語源であり，sahaya よりも古くからもちいられていた。hamba の頻度数は 277 回（hambalah 5 回，hambamu 2 回，hambanya 4 回）にたいし sahaya は57回（sahayamu 1 回，sahayanya 1 回）となりやはり hamba が圧倒的に多い。S. の場合，hamba 437回にたいし saya は29回もあり，sahaya でなく saya の数がこのように多いのは写本にあとで手をいれた結果であろう。hamba は丁寧な一人称代名詞として広く一般に使用された。したがってつぎの例のようにたとえ王であっても目下の宰相（年令は上）にたいし hamba をもちいて敬意をあらわすことがあった。

Sĕkarang bapa angkat *hamba* itu minta janjinya pada *hamba*. Ia hĕndakkan *hamba* jadikan ia ganti paman.「私を救って養子としたヤシ酒作りが，いまや彼との約束を私に果たすよう求めているのだ。彼はなんじの地位がほしいと私に求めているのだ」 (125-13)

世話になったヤシ酒作りには目上の男性にたいする親密的敬称の bapa(k) をもちい，ジャワ語起源の paman は「叔父」のことであるが，年長の男性にたいする呼びかけの代名詞として宰相にむかってもちいている。ただし編年史の paman 10例のすべてが王または王女が家臣にたいする用例である。hamba の語源意識は編年史ですでに明瞭でなくなっていたかもしれない。しかしいっそうへりくだるためには sahaya がもちいられた。

Bĕnarlah sĕpĕrti kata anakda itu; biarlah *sahaya* sĕmua naik sĕkali mĕngikutkan anakda.「(宰相の) 御令息のおっしゃることはもっともです。私たちみな(総司令官，全将軍など)御令息のお供をしてもう一度，上陸を試みましょう」 (179-15)

たしかにこのようなコンテキストのなかで sahaya が一人称代名詞として使われる

のは異例ともいえるので，この sahaya は「手下」(servants) と解し 'Let me and my men land again.' と読む [Brown 1970: 235] のも一理あるわけである。

sahaya>saya が一般化するにつれ，hamba はだんだんと使われなくなり，第二次大戦前にすでにその使用はまれになってきた。いまや耳にすることもほとんどない [Poedjawijatna/Zoetmulder 1964: 109]。ただし，私は，「はい」にあたることばに saya をもちいて会話するスンダ人を目撃したことがある。現代でも saya=aku ではないといえる。

patik, beta も古めかしい代名詞である。

patik ももとは「召し使い」を意味し（古ジャワ語 patik; アチェ語 paté?; バリ語 patik もおなじ語源），これは王，王女，王子，王女にたいする一人称代名詞であった。patik はほかのいくつかのことばとともに宮中語としてのあつかいをうけている [Alwi 1962: 61]。

ひとつおいた先の例文 (125-13) にたいする宰相の答えはつぎのようになっている。

> Tuanku, baiklah ayahanda tuanku jadikan ia akan ganti *patik*, biarlah *patik* bĕrhĕnti;「殿下，父なる殿下が彼（ヤシ酒作り）を私と交代させられるのも結構です。私を引退させてください」 (125-19)

ところでこの文にたいして王は，

> Tiada *beta* mau mĕmĕcat paman, karĕna pada bicara *beta* tiadakan jadi pĕkĕrjaan olehnya.「余はなんじを解雇したくない。余が思うに彼では仕事にならいだろう」 (125-21)

とおおせられている。この beta はヒンディー語起源の外来語だとされる。意味は「兄弟」[Winstedt 1927: 109]。たしかにインド・アーリア諸語で *bēṭṭa に由来するヒンディー語；パンジャブ語；ベンガル語；アッサム語 beṭā「少年，息子」があるが [Turner 1973]，かりに借用語だとするとマライ語にだけそれがはいったことになる。ただし，Gonda は beta を借用語としてはあげていない [Gonda 1973]。beta は王，王家の人びとによって彼等どうしのあいだで，また目下のものにたいし，主として書簡中でもちいられた [Winstedt 1927: 109]。しかし，編年史における beta の使用はこの説明とは合わない。beta は hamba, sahaya と共存することもできた。

> Maka kata bĕndahara: Salah sĕkali kata tuan-hamba itu. Karĕna *hamba* pun ada bĕrcĕrmin; pada mata *beta* baik juga si Hassan, karĕna ia orang muda; tĕtapi tĕrmanis *hamba* sĕdikit.「(大衆にむかい) 宰相いわく，あなたた

ちの言っていることは皆，間違っています。私はめがねが必要な身です。私の目には（息子の）Hassan が端麗だと映ります。彼はまだ若いのです。しかし私は優雅さではひけを取りません」 (288-07)

ここでは hamba と beta とは談話 (discourse) のなかで共存している。S. [202] では，

Karĕna *hamba* pun ada bĕrcĕrmin pada mata *beta*.

のようにひとつの文 (clause) のなかで両方が使われているが，このような使われかたはまず不可能で Abdullah 本のような切りかたがただしい [WINSTEDT 1930: 185] というのも，共存できるということからみて大きな違いであるとはいえない。ただし W. [161] では，

karĕna (*hamba*) pun ada cĕrmin pada mata *hamba*.

のように hamba で統一されている。（括弧は Shellabear テキストからの挿入というが，とすると S. にはさらにいくつかのテキストがあったことをおもわせる。）また，つぎのようなあんま師（宰相の端女（はしため））が武人としての称号 (hang) をもつ男性にたいする発話のなかにもある。

Biasa *sahaya* masuk kĕ rumah datuk bĕndahara; makin anaknya yang bĕrnama tun Teja itu biasa bĕrlulut pada *beta*.「いつも私は宰相殿のお宅に伺って御令嬢の Teja さまに私があんまして差上げるのです」 (247-11)

これは S. [218] では本文とおなじだが，W. [170] では sahaya は beta と書かれ統一されている。すくなくとも編年史では，外来語 beta が階層を問わず一人称代名詞としてもちいられ，またすでにあった一人称代名詞とも混用できたといわざるをえない。それが今世紀初頭には，Winstedt のいうようにマライ半島ではその使用がせばめられたのであろう。しかし現在，beta はインドネシアのモルッカ諸島アンボン方言で aku のかわりにもちいられる [BADUDU 1975: 98] ほかは，韻文中に使われるにすぎない。

マライ語は名詞にたいする単数・複数の明示的な区別をもたない。したがってこのような普通名詞の転用による人称代名詞の複数は sĕmua, sĕkalian「すべて」をつけてあらわされる。sahaya sĕmua はかなり多いが patik sĕmua (203—33), hamba sĕmuanya (122—06) は各1例，patik sĕkalian はかなり多いが sahaya sĕkalian (183—31), hamba sĕkalian (173+03) は各1例のみ，sĕmua と sĕkalian とは「すべて」と「全部」くらいの違いはあるが，sahaya sĕmua と patik sĕkalian が多いのは著者の筆癖というべきか。ただし beta についた例はまったくない。beta と

sahaya, hamba との使用上の大きな違いである。

親族名称をもちいる一人称の方法については後述する。

(ii) 二 人 称

二人称としてもっとも頻繁にもちいられた丁寧形は tuan である。かつて Humboldt はこれをサンスクリット tvam「なんじ」の借用語とみたが [1836: 33], これをは誤りであって Dempwolff の考えたように原オーストロネシア語形として *tuwan 立てるのがただしい（マライ語 tuhan「神」; ジャワ語 tuwan「(非ジャワ人男性への敬称)」; フィジ語 tua「(子供から) おじいさん」; サモア語 a-tua「神」も同語源)。Dempwolff は「主」(Herr) というもとの意味をあたえるように tuan は敬うべき対象にもちいられたが, それは現代語のようにかならずしも男性とはきまっていなかった。

Maka bĕndahara sĕri Maharaja bĕrtanya pada istĕrinya, katanya: *Tuan, tuan,* destar yang mana patut dĕngan kain baju beta ini?「宰相 sĕri Maharaja は妻に尋ねて言った。君, 君, どの頭巾がこの私の着物と合うだろうか」 (227-29)

この tuan は男性専用になるにつれ, tuan putĕri「王女」(putĕri はサンスクリット putrī-「女児」から) のような言いまわしがあらわれるが [Winstedt 1927: 109], 編年史にはそのような例はまだ見られない。また, 王が相手にむかって tuan ということはないが,

adat raja Pahang mĕmanggil orang kaya-kaya Mĕlaka "tuan".「パハン王はマラッカの富豪を tuan と呼んだ」 (199-26)

というような特別な場合もあった。

tuan は hamba, -ku とともに tuanhamba, tuanku という形でもよくあらわれる。my Lord とにたところがあるが, tuanku はより高位のひとに, それにはんし tuan hamba は同位のまたは目下のひとにもちいられている。hamba のほうに謙遜の意があるのだからこの現象は変だ [Poedjawijatna/Zoetmulder 1964: 113] というのももっともである。編年史に記されている高官の序列は, 宰相 (bĕndahara), 法相 (kadi), 蔵相 (pĕnghulu, pĕnghulu bĕndahari), 内相 (tĕmĕnggung), 総司令官 (laksamana) (W. [149] では bĕndahara, pĕnghulu, tĕmĕnggung, kadi, laksamana) のようになるが (203-10), その間での tuanku, tuanhamba の使いわけはつぎのようになる。

Maka sĕmbah *bĕndahara* Paduka Raja dan sĕgala mĕntĕri: Ya *tuanku,* ja-

ngan apa dipĕrbinasa hati kami sĕkalian dĕngan titah yang dĕmikian itu.
「(陛下に) 宰相とすべての大臣が言上した。陛下，そのようなお言葉で私たち皆の心を打ちくだかないで下さい」 (185-25)

Maka kata bĕndahara: Tiada hamba tunjukkan, kalau *tuanhamba* ambil. Maka kata laksamana: Jikalau tiada *datuk* anugĕrahkan, gilakah sahaya mĕngambil dia?「宰相いわく，(それを) 私は見せたくない，多分，あなたが取ろうとするから。総司令官いわく，閣下が下さらないのなら，私がそれを頂いてゆきますが，気がふれたとお思いでしょうか」 (207-13)

sĕmbah laksamana kĕpada bĕndahara: Sungguhlah *tuanku* sĕdia asal orang bĕsar-bĕsar,「総司令官が宰相にいわく，あなたこそ大人(たいじん)のなかで真にできたお方」 (183-30)

tuanku, tuanhamba はおろか tuan でさえ現代語では話しことば，書きことばにおいてあまり使われなくなってきている [POEDJAWIJATNA/ZOETMULDER 1964: 113]。そのかわりになるのが同位の saudara, awak, より尊敬をあらわすための bapak, ĕncik である。編年史には tuan のさらに最高位にたいするもちいかたがあった。Yang Dipĕrtuan は直訳すると「tuan として尊敬されている人」ということであるが，王にたいする以外はもちいられない。

Baiklah, *tuanku*; karĕna patik sĕkalian ini hamba kĕ bawah *duli Yang Dipertuan*. Apabila *Yang Dipertuan* anugĕrahkan kĕpada anakda paduka anakdalah patik sĕmbah;「よく分かりました，王さま，私たちは皆，王さまのもとにあってお慕いしております。王さまが (先王であった) 王子の息子たち (私たち) に慈悲を賜わりますならば，私たちは (王さまを) 礼賛し奉ります」 (304-21)

duli はサンスクリット dhūli-「塵」に由来し，マライ語では独特の意味の変化をとげた。「塵」はことに「王の足の裏の塵」を意味するようになり，さらに庶民と王とのあいだはあまりにへだたっていて庶民は王の足についた塵をいただけるのみ [ABDULLAH 1952: 313] であるから，ついに duli のみに「王」の意味が発生する。duli は多義となる。「塵」の意味では，

lĕbu *duli* itu pun hilanglah,「塵やほこりも消えた」 (015-01)

があるが，duli が単独で「王」の意味になるのは，

barang siapa mĕlalui dia salah kĕbawah *duli*,「それ (禁) を破るものはだれでも王のもとで有罪となる」。 (084-14)

しかし，二人称の用法としては，*duli* Yang Dipĕrtuan のほか，*duli* tuanku も多くもちいられている。また，称号としては *duli* raja, *duli* baginda, *duli* sultan のように「王，陛下，イスラム侯主」などにつけて，いわば「常套的形容語」(conventional epithet) としてもちいられた。

duli とにてはいるが，形容語としての性格がいっそう強いことばに paduka がある。これもサンスクリットの pādukā-「くつ」がその源である。このことばも dhūli- とおなじような過程をへて，古ジャワ語ですでに「王」(Zijne Majesteit) を意味するようになっているが，編年史では paduka tuan のように修飾語としてもちいられている。paduka は敬称として「王の」(royal) を意味する。duli とも共存して (duli) paduka ayahanda, (duli) paduka kakanda, (duli) paduka adinda のように，親族名称 ayah「父，おじ」，kakak「兄，姉」，adik「弟，妹」に -nda のついた敬体形とともにあらわれる。

Paduka anakda ĕmpunya sĕmbah datang kĕ bawah duli *paduka* ayahanda. 「陛下の息子（ブルナイ王）が陛下なる父上の足下に敬意を送り奉る」(Your Highness' son sends obeisance to his royal father. [Brown 1970: 82])

(143-14)

この例は書簡中にあって anak という親族名称が自称詞として使われている。*duli* paduka tuan という言いかたも可能であるが，編年史には1例もない。

現在，インドネシア語の男性への敬称 tuan, bapak に対応するのはマライシア語の ĕncik（短縮形 cik）であるが，インドネシアのスマトラ東部（ミナンカバウ語）ではこの ĕncik と対応する形 inyie? が女性への敬称としてもちいられる。編年史には ĕncik がわずか6回あらわれるが，家柄のある男性にたいし親密的に呼びかけている例が2例ある。あと4例は称号としての用法。

Maka kata sĕri Bija Diraja: Sabar dahulu, *encik*, bĕlum kĕtikanya. 「(総司令官) sĕri Bija Diraja は言った。ちょっと待って，殿 (my friend [Brown 1970: 113])，まだその時ではない」　(192-34)

Ĕncik (*Ĕncik* Isak [W: 146]), marilah kita mĕngamuk, 「(Isak) 殿，さあ攻撃開始」

さきにも触れた datuk（短縮形 tuk）は「家長，祖父」を意味したが，datuk は ĕncik よりも尊敬の度合が高く，王の側臣たちにもちいられている。tuan と異なり ĕncik, datuk には hamba, -ku をつけた用例がない。tuan にそれが可能なのは遠い間柄を密接にするためにとられた，感情的，感傷的な「装飾的形容語」(epitheta

ornantia) の挿入 [イェスペルセン 1958: 128] とみなすこともできよう。

Maka kata sĕgala anak buahnya sĕri Nara Diraja: Bagaimana maka *datuk* hĕndak bĕristĕri muda, karĕna *datuk* sudah tua,「(宰相) sĕri Nara Diraja の従者たちは言った。閣下がそんなに若い女を娶られるとはこれいかに，閣下はもうお年を召していられるというのに」 (105-11)

maka kata bĕndahara: Hai budak-budak, maukah mĕmandang ĕmas? Maka sahut anak buahnya: Mau, *datuk*.「宰相いわく，君たち (you boy [BROWN 1970: 154]) 金を見たいかね？従者たち答えて，もちろんです，閣下」 (279-26)

二人称にたいする呼称として，上の例文中に人称名詞 budak が出ている。budak は「小姓，下僕」である。そのほか，人称名詞として abang「兄貴，先輩」，awang「若造」，inang「侍女」があるが，二人称への呼びかけとしてもちいられている例は abang, awang である。

Abang, abang, undurlah *abang* kĕ tĕngah;「兄さん，もうちょっと真中へ行ってよ」 (216-16)

Maka kata bĕndahara pada sĕorang cucunya: *Awang, awang,* maukah makan sĕpah?「宰相が孫にいわく，君，君，キンマを嚙むかね？」 (288-14)

現代のマライシア語でもちいられる対等あるいは目下への二人称代名詞 awak (「身体」の意味もある。この方が原意である)，mika (ペラク方言)，diri (一人称にもなる。「自身」が原意) のような例は編年史にまったく見られない。また，現代インドネシア語で対等あるいは目下への呼称としてもちいられる人称名詞 saudara はまだ「兄弟姉妹」の意味しかない。

maka titah baginda...: Bĕrkĕnanlah kita akan kĕhĕndak *saudara* kita itu, tĕtapi jangan *saudara* kita bĕrsusah-susah mĕnyuruhkan ananda baginda itu kĕ mari;「陛下仰せられるに，わが兄弟 (シンガポール王) の申し出でももっともだ。しかし王の王子殿がわざわざこちらにお出でくださるのは恐縮だ」 (042-05)

ここの saudara のもちいかたは，かならずしも「同腹の」兄弟ではなく「同士」と読んでもよいかもしれない。なお，ここの kita は「威厳の nous」。それはつぎの例でもっとはっきりする。

Maka baginda bĕrsabda pula kĕpada sayyidi Ali Ghiyathu'd-Din...: Hai *saudara*ku, baik-baik kamu kĕdua ini mĕmĕliharakan anakku kĕdua itu;「陛

下は（官吏の）sayyidi Ali らにこう話された。わが同士よ，君たち二人で私の二人の子の面倒を十分に見ておくれ」　(064-09)

このような saudara の用法が，やがて，現代インドネシア語の二人称代名詞的用法へと発展してゆくのである。現代語では saudara を男性専用に，女性にたいしては sa- udari がもちいられる。語末母音の対立による区別は，サンスクリットの sodara-; sodarī- の区別に根ざすが，このような復古主義は最近の傾向にもとづくものであって，編年史には saudari という形はまったく使われていない。

(iii) 親族名称

親族名称は，原則的に三人称の代名詞としても機能することができる。編年史にあらわれる親族名称は表3のようになる。あらわしかたは，たてに ego を中心とした世代，よこに直系度 (lineal; co-lineal; ablineal)，点線の左は男性，右は女性，点線の上は同世代の年上，下は年下をしめすものとする。（　）は現代語にはあるが編年史には出てこないもの。[　] は合成形である。moyang と nenek とは合成語になると nenek moyang で「祖先」を意味する。kakek に対応する女性形はない。性の区別が必要な場合には，laki-laki「男(の)」，pĕrĕmpuan「女(の)」をそえた合成形による。「孫」は四代目まで一次形をもつが，oneng は重複形であり単純形は無意味と

表　3

Lineal	Co-lineal	Ablineal
moyang	左に同じ	左に同じ
nenek (kakek)	左に同じ	左に同じ
ayah　ibu	bapak　ĕmak paman　(bibi)	左に同じ
ego	kakak adik	pupu
anak	[anak saudara] (kĕmanakan)	[dua pupu]
cucu		
cicit	anak	pupu
piut		
(oneng-oneng)		

なる。bapak は ayah をカバーすることができるが ayah のほうが尊敬の度合が強い。

maka raja Jaknaka bĕrtanya pada bundanya: Siapa *bapa*ku?「Jaknaka 王は母に尋ねた。私の父は誰ですか」 (176-11)

ĕmak は短縮形 mak となり編年史には合成形としての5例があるのみ。

Maka pada suatu hari Sĕmĕrluki masuk mĕnghadap *ibu*nya, maka ia tĕrpandang pada *mak* bungsunya, ...: Bagaimana ĕngkau hĕndak akan putĕri bungsu itu karĕna ia *mak* saudaramu, lagi *mak* tirimu,「ある日 Sĕmĕrluki は彼の母に面会に行った。ところで彼は一番末のおばに一瞥された。…一体おまえは（私の）一番下の妻が気に入ったりして，彼女はおまえの兄弟の母（＝おば）であり，おまえの義理の母ではないか」 (165-15～21)

ほかに mak bungsu, mak saudaramu が1例づつある。この例からわかるように，mak の概念は ego を中心として絶対的にきまっていて，それはそのあとにどのような修飾語がこようとも変わらないということである。したがって，mak が「おば」であるのはもちろん，「母」と読まなければならない場合も起こる。そのような区別の必要な言語のほうがむしろ多いであろう。いっぽう，ibu が「母」の意味でもちいられているのはさきの1例のみで，そのほかには「(蹴鞠の) 主将」(196-11)，「(動物の) めす」(214-21) (289-10) がある。ibu はもっぱら尊敬・謙譲の前接辞 -nda をともなって bunda (17例)，bundanya (9例) としてあらわれている。

Bĕtapa gĕrangan halnya ayah *bunda* hamba itu, tidak hamba tahu.「私の父母が一体どうなったか，私には分からなかった」 (121-09)

現代語では ibu は mak よりいっそう敬意をこめて既婚の女性を指すことができるが，編年史の例はすべて「母」を意味するものばかり。これは偶然であろう。

paman, bibi はジャワ語に由来し日本語の「叔父」「叔母」にちょうど相当するが，編年史の paman はジャワ島を舞台に年上の男性を二人称として親密的にもちいられている例である。現代語では paman と同義で bapak kĕcil「小さい bapak」，その短縮形 pakcik ももちいられるが，編年史には無論まだその例は見られない。

saudara はサンスクリット借用語であるが，saudara のみで総称として「兄弟姉妹」をあらわし，また合成語の一部としてもちいられる。anak saudara「おい，めい」は，現在，ミナンカバウ語 (kamanakan) 由来の kĕmanakan とともにもちいられる。「第一いとこ」も saudara sĕpupu のようになる。anak は長子が sulung「初産」，末子が bungsu「末生」をつけて，あるいは sulung, bungsu のみによって，特に区別される。編年史では sulung が10例，bungsu が20例ある。編年史に例はないが現代

語では，anak のいる夫婦同士が，夫は妻を ibu，妻は夫を bapak と，指称にも呼称にももちいることができる。同様の例は日本語にも見られるが，これは親族名称の子供中心的な (child-centered) 使いかた [Fischer 1964: 123] にあたる。ただし，自分の子供の年上のほうを kakak などということはできない。（ジャワ人の貴族の妻は夫を mas, kangmas「兄」，夫は妻を ḍik, jěng「妹」と呼びあう。）

なお，表3には出ていないが laki「夫」，suami「夫」，istěri「妻」（サンスクリット svāmin-, strī- から），bini「妻」(istěri よりくだけている)，inang「乳母」が編年史にも出ており，ipar「義兄弟，義姉妹，配偶者の兄弟姉妹」は出現なし。

また，現代語には anak の丁寧形 putěra「男児」，putěri「女児」（サンスクリット putra-「息子」，putrī-「娘」から）があり，他人の子供を指すためには無論のこと，自分の子供のことを他人にたいして述べる場合にももちいられる。ただし，呼称としてもちいられることはない。この場合も，anak への丁寧な言及が要求されるシチュエーションにおいては，絶対的にその位置づけがなされるということである。編年史の putěra (15回)，putra（1回），putěri (112回)，putri（2回）についてみると，呼びかけあるいは自分の子供にたいする言及の例はない。

4. 親族名称の一・二人称的用法

人称名詞としての親族語彙は一・二人称のかわりにもなりうる。Fischer は対称詞（話し相手に言及したり，話し相手の注意を喚起するためにもちいられることば）には，呼びかけ的 (vocative) 用法と代名詞的 (pronominal) コンテキストにあらわれる用法とがあることを注意しているが，呼びかけ的と代名詞的とは，言語によって対称詞がかならずしも共用できるとはかぎらない。マライ語では呼びかける場合に人名，転用された人称代名詞にうったえることが一般的である。

編年史には親族語彙につく -nda という前接辞があり，それは尊敬のみならず謙譲をあらわすこともあった。nenek（4回）は nenda（5回），ayah（9回）は ayah-anda (44回)，ibu（5回，ただし転用をふくむ）は bunda (17回)，mak (ěmak)（5回）は manda (23回)，kakak（4回）は kakanda (20回)，adik（5回）は adinda (32回)，anak (461回) は anakda (70回) または ananda (33回)，cucu (75回) は cunda（8回）または cucunda（2回）のようになる。なお，moyang（2回），bapak (28回)，pupu（1回），cicit（7回），piut（8回）には -nda のついた形はあらわれない。語源的には称号の baginda「陛下」(838回)，職名の biduanda（5回）も bhāgī-「所有者，幸運な人」，vidvān-「知識ある，熟練した」というサン

クリスットの借用語幹に -nda をつけて派生された語であると考えられる。ただし，Gonda は baginda, biduanda をあげていない [GONDA 1973]。

(i) 対 称 詞

対称詞の呼びかけ的用法として親族名称をそのまま使うことは，現代日本語ではあまりおこなわれない，シェイクスピア『ヘンリー四世』の，

Hotspur. *Cousin*, I think thou art enamoured on his follies:「ホッパー　ヴァーノン君，どうやら君は，あの馬鹿者にすっかり惚れ込んだらしいが」(第五幕第二場，中野好夫訳)

も，翻訳では人名に置きかえるなど日本語の事情をよくあらわしている。しかし，編年史にはつぎのような例がある。

Hai, anak *cucu*ku, jangan kamu tukarkan agama dĕngan dunia.「嗚呼，わが孫たちよ，お前たち信仰と現世とを取り替えてはいかんぞ」　(208-02)

Hai, *anak*ku, jangan bĕrbanyak tamak akan sĕgala harta orang,「嗚呼，わが子よ，他人の財産に望みを託すなかれ」　(064-02)

Hai, *bapa*ku, bahwa aku kĕdatangan suatu pĕkĕrjaan yang amat musykil;「嗚呼，わが友よ，たいへん面倒なことが起こってしまった」　(069-24)

この bapa(k) は王から宰相 (mangkubumi) にむかって発せられた虚構的 (fictive) なもので，血縁関係にもとづくものではない。

Nenek baik-baik mĕmakai ikat pinggang datuk Paduka Raja ini; jangan *nenek* bawa lari.「お祖父さま，この大王さまの腰帯を使われた方がいいのでは。お祖父さまが拉致されないために」　(299-09)

呼びかけの例はかならずしも多くないが，それでも -ku「私の」をつけてあらわすことがある。しかし -nda 形が呼びかけとしてもちいられる例は見あたらない。マライ人は代名詞によって呼びかけることを不作法と考えているが [WINSTEDT 1927: 107]，親族名称についても同様であったといえるようだ。

代名詞的用法の例，

Kĕtahuilah oleh *ayahanda,* bahwa hamba ini tĕlah dua bulanlah sĕkarang tiada haid.「父上お分かり下さい，私はもうふた月，月のものがありません」　(009-23)

Akan anak beta sĕkaliannya budak-budak bĕlaka, pĕrtama kĕpada Allah subhanahu wataala beta sĕrahkan, kĕmudian kĕpada *adik*lah.「私の子供は皆まだ若いので，まず最高にして称讃さるべき神に，つぎに君(弟)に（金を）ゆ

だねよう」　(153-30)

Paduka *kakanda* empunya sĕmbah datang kĕpada paduka *adinda*; jikalau ada kilaf bĕbal paduka *kakanda*, mĕlainkan ampun paduka *adinda* banyak-banyak akan paduka *kakanda*.「兄（私）からの敬意をこめて弟（閣下）へ，もし兄に愚かな誤謬があるとせば，弟よ，多大の寛恕を兄に示したまえ」　(202-06)

この最後の例は書簡中にあるもので，「兄」「弟」間に血縁関係は存在せず，虚構的にもちいられている。兄はシアック国王 Ibrahim, 弟はマラッカ国王 Alau'd-Din 王。また「兄」は自称詞としてもちいられた例である。

(ii) 自 称 詞

自称詞として -nda は，さきの例のように自称にももちいることができる。したがって，-nda を尊敬 (respect) とか情愛 (affection) をあらわす前接辞と定義し，対称にたいしてのみもちいられるようにいう [MACDONALD／DARDJOWIDJOJO 1967: 69] のは片手落ちである。-nda には尊敬のほか謙譲の働きもある。統合していえば「丁寧」ということになる。日本語の接頭辞「お」にもそのような機能がある。日本語では親族名称が，ego と中心とした上の世代には対称詞として，下の世代には自称詞としてもちいられる [鈴木 1973: 149-151]。父は子にたいして自分のことを「(お)父さん」，兄は弟にたいして「兄さん」ということができる。しかしマライ語では，

Kakanda yang kucintai! Bahwa dĕngan surat ini tiadalah suatu yang *adinda* kirimkan, hanya sĕkadar salam dan doa ...「愛する兄上さま，この手紙で私（弟）が何か特別のことを言おうとしているのではありません，ただご挨拶だけのつもりで…」[POEDJAWIJATNA／ZOETMULDER 1964: 111]

Syahdan surat *anakda* ini sifat *anakda* sĕndiri mĕmpĕrmaklumkan bahwasanya bĕrkat ayahanda bunda kĕdua alhamdulillah, adalah *anakda* sehat-sehat saja.「おまえ（子）のこの手紙には，父母のおかげでおまえ（子）がずっと健康でいられることが十分に記されてあった」(POEDJAWIJATNA／ZOETMULDER 1964: 111)

のように日本語の原則とは異なって，対象によって限定的に使いわけられるのではなくその選択は自由であり，また，-nda はいかなる場合にもつけることができるのである。

sahaya (saya) に -nda のついた，現代語では古語となってしまった senda の例が編年史には2回ある。

Ananda yang duduk di atas itulah oleh *senda* pohonkan akan paduka ananda

itu.「上座に坐っていられる御息女をわが王の御養子としてわたくしが頂いて参ります」 (062-10)

Tuanku, tanah sĕdikit ini *senda* pohonkan;「閣下, この少しの土地をわたくしは頂きたいのです」 (158-17)

senda はこの2例からもわかるとおり謙遜語である。

なお 3. (ii) (143-14) の anakda のほかの自称詞としての例,

Salam doa paduka *adinda*, datang kĕpada kakanda.「弟から兄上へご挨拶申します」 (199-15)

adinda に当たるのはマラッカ国王 Alau'd-Din, kakanda にあたるのはパハン国王 Muhammad で異母兄弟になる。このように編年史の例では書簡形式が多いけれども, 現代語では, 目上の年長者から目下の年少者にたいする親密な自称詞として bapak (男性から), ibu (女性から) はしばしば耳にする親族名称である。しかし編年史ではそのような例を見出せない。やはり口語的であるためであろう。また, 現代のマライ語では恋人どうしが男性は abang (3. (ii) 参照), 女性は adik で自称することがある [WINSTEDT 1927: 111]。これも編年史には例がない。

5. 称号・人名・人称詞の用法

マライ人の伝統的習慣では, 指称, 呼称に代名詞をつかうより人名, 称号, 人称詞を後接辞 (proclitic) とした人称名詞 (personal nouns) をもちいるほうが一般的通常的であった [MACDONALD／DARDJOWIDJOJO 1967: 120-126]。そのほうがむしろ丁寧な (polite) 呼称となるが, 逆に, 人名, 称号などが自称詞としてもちいられれば, 子供じみるか独断的な (assertive) 用法となる [WINSTEDT 1927: 111]。

(i) 称　号

称号は 3. (ii) にかかげた bĕndahara (568回) (←サンスクリット bhāṇḍāgara-「宝庫」), kadi (32回) (←アラビア語 qāḍī「裁判官」), pĕnghulu (48回), tĕmĕnggung (44回), laksamana (199回)(←サ. lakṣmaṇa-「ツル, ラーマの異母弟の名」) のほか, maharaja「大王」(188回), raja「王」(1445回)(←サ. rājā), raja muda「皇子」, putĕra (15回)～putra (1回)「皇子」(←サ. putra-「男児」), putĕri (112回)～putri (2回)「王女」(←サ. putrī-「女児」), mĕgat(21回)「母方が王家, 父方が平民の間の子」(←サ. magadha-「国名」), sultan「回教王」(708回)(←ア. sulṭān), baginda「陛下」(838回) (←サ. bhāgī-「所有者」), bĕtara「神, 支配者」(92回) (←サ. bhaṭṭāra-「至尊」, マライ・ジャワでこのことばはヒンドゥー教の神々, マ

ジャパヒット国王にたいしてもちいられた [GONDA 1973: 97, 218]。用例中の66例まで bĕtara Majapahit という表現ででてくる), adipati「摂政, 太守」(1回)(←サ. adhipati-「主, 王」, マラッカ王の代理にあたえられた最高位の称号 [WILKINSON 1943]), patih「宰相」(72回)(←ジャワ語←サ. pati-「主, 支配者」, pati- が patih と語末に -h をおびるにいたったのはジャワ語 patih「統べる」との混淆 (blend) である [GONDA 1973: 417]), mangkubumi「宰相」(7国)(さきほどの bĕndahara が一般的呼び名であるのにたいし, これは地域的 (local) 名称であって [WILKINSON 1943],

maka *bendahara*lah mĕngarang surat itu, ... Siapa mĕngarang surat ini? Maka sĕmbah tun Tĕlanai: *Mangkubumi* raja Malaka, tuanku.「宰相が手紙を認められた。…どなたがこの手紙を書かれたのか。Tĕlanai 殿は奏上して, マラッカ王の宰相でございますよ, 閣下」 (116-25～117-15)

のような使いわけがある), panglima (2回)～pĕnglima (5回)「司令官」(編年史には panglima gajah「象指揮官」, panglima bandar「地区司令官」の例のみがある), syahbandar「港湾長」(2回), hulubalang「軍長, 将軍」(132回), mĕnteri「大臣」(111回)(←サ. mantrī), nakoda「艦長, 船長」(21回)(←ペルシア語 nā-khudā), ジャワ語として radin「王」(41回), pangeran (2回)～pĕngeran (1回)「貴族」がある。称号の例はかなり多いので, 引用はふたつみつにとどめる。

代名詞的用法,

Raja Mĕndĕliar hĕndaklah tuan hamba bĕrkata bĕnar, bĕrapa ada ĕmas tuanhamba.「王さまの金(きん)がいくらあるのか本当のことを Mĕndĕliar 王, お漏らし下さらんことを」 (279-16)

これは宰相のことば。

Maka titah sultan Mansur Syah: Hĕndaklah *bĕndahara* Paduka Raja karang surat kita kĕ bĕnua Siam.「Mansur Syah 王は仰せられていわく, シャム国へ送る手紙は宰相 (君) が書いてもらいたい」(We desire that you compose our letter to Siam. [BROWN 1970: 60]) (116-15)

呼びかけ的用法,

Patih Adam, dĕngarlah kata anak hamba itu, ia hĕndak bĕrlakikan patih Adam.「(宰相) Adam さん, 私の子供の言っていることをお聞きなさい, Adam さんを夫にしようとしているのです」 (231-13)

Maka kata sĕri Nara Diraja: Hai, *maharaja* Dewa Sura, bagaimanatah tiada

dĕmikian?「sĕri Nara Diraja（マラッカ国の名士）言うに，もしもし，（パハン国大王）Dewa Sura 殿，もしそうならなかったらどうなるのでしょう」

(113-03)

sĕri（←サ．śrī-「美」）は常套的形容語としてしばしば人名につけられる。

(ii) 人　名

直接，人名のみによる二人称としての用法は，目下にたいする場合にかぎられる。

maka titah baginda: Sabas. Bahwa *seri Nara Diraja*lah se-bĕnar-bĕnar hamba yang sĕmpurna.「陛下は仰せられた。でかしたぞ，*seri Nara Diraja*（なんじ）こそ真の完璧な部下と言えるもの」　(147-11)

自称のためにもちいられることもある。

Maka kata Tun Bayajit: Ada pun akan *Bayajit* tumpah darahnya pun di Malaka, matinya pun di Malaka juga.「Bayajit 殿が言うに，*Bayajit* はマラッカで生まれた，で死ぬのもまたマラッカだ」W. [152]

この文はむけられた対象が明確でないが自問のようにもとれる。しかし機能としては謙譲とみることができる。

Maka bĕndahara bĕrkata pada cucu baginda, tun Pawah namanya: *Pawah, Pawah,* jangan ĕngkau diam di nĕgĕri,「宰相は殿下の御孫 Pawah 殿に言われた。*Pawah* よ，*Pawah* よ，君はここに住んではいけない」　(208-33)

Maka bĕndahara bĕrkata pula kĕpada cicitnya tun Isap namanya: *Isap, Isap,* ĕngkau jangan mĕncari pĕncarianmu di balairung raja.「宰相は曾孫 Isap 殿に言われた。*Isap* よ，*Isap* よ，君は王宮で暮らしてはいけない」

(209-02)

称号（職名）は，tuan では丁寧にすぎ ĕngkau では軽視のおそれがあるときに対称詞としてもちいられる［武富　1942: 662］ともいわれるが，いっぽう人名による用法は，当然のことながら，直情的激情的な場合が多い。

(iii) 人 称 詞

人称詞は人称名詞の前におかれて，敬称，愛称，謙称，貶称などの機能をあらわす。人称詞は原則的に独立してはもちいられないが，転用された二人称代名詞の tuan, ĕncik, datuk, 親族名称の bapak, ĕmak は人称詞ともなりうる。現代語で既婚女子への nyonya, 未婚女子への nona は代名詞（呼びかけ）とも人称詞ともなるが，編年史にはまったく登場しない。これがジャワ語起源（nyonyah, nonah）であるせいもあろう。編年史にあらわれる人称詞は頻度順に，tun（1115回），hang（299回），

sang (191回), si (94回), dang (8回) となる。このうち現在ももちいられるのは, sang と si にすぎない。

tun は14世紀ごろ, スマトラ北部のパサイ王国で王家の構成員にたいしもちいられた称号で, その後15世紀にはマラッカ王国で宰相の家系のものおよび貴族につけられる称号となった。現代マライシアで王, 王室の人びとにむかってつかわれる敬称 tĕngku は tun-ku「私の tun」に由来するが, この言いかたは1700年代にジョホール王国で発生した [WILKINSON 1943]。tĕngku (tunku) という語例は, 編年史にはまだあらわれていない。このことは, 編年史が18世紀以前につくられたという有力な証拠となる。

Maka titah bĕtara: *Tun* Bijaya Sura, mari sini.「王は仰せられた。Bijaya Sura 殿, こちらへどうぞ」 (133-35)

hang は15世紀の Mansur Syah のころ, 武勲のあった人にあたえられた称号とされる。いまは固定した人名に残るのみ。ただし, 現在のマライシアのケダー, ペナン, 北部ペラクの各州では二人称代名詞として ĕngkau のかわりにもちいられる [WINSTEDT 1927: 107]。

sang は, もと神々にたいしてつけられた。9世紀に古ジャワ語で書かれた華厳経にあたる仏典は, その題名が *Sang* Hyang Kamahāyānikan『聖なる大乗 (mahāyānika) の教え』となっているが, hyang には「神」の意味もある。sang には現在も尊敬 (reverence) の意味が残っている。*sang* Surya「太陽神」(←サ. sūrya-), *sang* aji「王」(←古ジャワ語 haji) (124-09ほか)のほか, *sang* Sura pahlawan (←サ. sura-「神」), *sang* Sĕtia pahlawan (←サ. satya-「誠実」) (180-03～04) のように英雄 (pahlawan) の個人名としてもつけられている。また, 王妃が出産した二人の男児はただちに, *sang* Maniaka, *sang* Nila Utama (032-16) と命名されたこともある。人間以外のものにも, それが尊敬, 畏怖の対象となったとき, sang をつけることがある。現代のインドネシア共和国の国旗は *sang* Merah Putih「紅白旗」といわれる。ただし編年史には人間以外への sang の例は見あたらない。現代語の sang の用法は, sang が非人間にたいしもちいられることが多い時期をへたためか, 人間にたいし sang をもちいるとむしろあざけり (ridicule) を意味する [MACDONALD／DARDJOWIDJOIO 1967: 126, LI 1976: 67] といわれる。インドネシアの1966年の政治的不安定のときには当時のスカルノ大統領が *Sang* Presiden といわれ嘲笑された。sang はことに非人間につけられた場合, 呼びかけにもちいられることが多いが, 編年史には呼びかけの例もない。

si はオーストロネシア祖語の人称限定詞形 *t'i を継承する。タガログ語，チャモロ語の si は，主格または主題をあらわす人称冠詞として固有名詞（人名）についてあらわれる。（si にたいする斜格は ni となる。）タガログ語 sino「誰」，siyá「彼，彼女」はsi＋*anu「何」，si＋*iya「三人称単数代名詞」に由来することがあきらかである。マライ語の疑問代名詞 siapa「誰」（si＋apa「何」），ジャワ語の sing「人称関係代名詞」（si＋ng「連結辞」）も同様。*t'iḍa「三人称複数代名詞」（タガログ語 silá; チャモロ語 siha; パラウ語 tir）も，ここの *t'i- は人称限定詞の可能性がある。

人名に冠詞をつけるのは，アイルランド人，スコットランド人の首領の姓に O', Mac' をともなうことでよく知られているが，英語でも男子の名の前に「優れた」ということを意味して the をつけることがある。イタリアの画家，文学者が姓に冠詞をつけるのをまねてフランスにもその風がおこり，また南フランスでは農民や労働者が一種の親しみをあらわすために名（prénom）の前に冠詞をつける［山崎／有永　1956: 37］。

マライ語の si は sang と異なって尊敬の意味はなく，指示（reference）の働きがあるのみで，*si* Anu「某氏」（anu「何」）（280-31ほか）のように中立的にもちいることができる。そして人名，普通名詞の前につけられたときは，それが子供，目下，親友，動物などであることをあらわす。現代語では自称詞としてもちいられることはないが，編年史には自称詞の例も見出される。この場合，si には貶下的意味が発生するため，現在の若者はそれを使われるのをこのまない［MACDONALD／DARDJOWIDJOJO 1967: 125］といわれる。

> Bagaimana datuk ini, bagai pak *si* běndul, diběri raja usungan ditaruh?「あなた（宰相）はまるで間が抜けてませんか，王が下さった御輿を，乗らずに仕舞い込んでおくなんて」　(206-019)

pak *si* běndul とは「お馬鹿さん」のこと。

> Maka kata tuan Isap: Akan *si* Isap tiada měnyěmbah raja-raja yang lain mělainkan sultan Mahmud Syah.「Isap 殿は言う。それがし Isap は Mahmud 王以外のどの王にも礼拝しません」　(212-27)
>
> Maka kata sěgala orang itu: Cih, *si* Ruzul, kita sěmua dipěrdayakannya.「人びと皆が言った。くそっ，Ruzul（クリンの男）め，（おまえは）われわれ皆を騙しおった」　(194-10)

si はまた，人名以外のことばについて特徴づけあるいは注意を喚起する（karakteriseren of releveren）［GONDA　1943: 512］。

Bunga bĕladung *si* air mata.「花は涙 (*si* air mata) を露とたくわえて」 (108-13)

Maka sĕmbah pĕnghulu dĕngan itu: *Si* Datang Lama lain, *si* Datang Baharu lain.「蔵相は言上した。下僕の一人は「もう来た君」，もう一人は「今来た君」と名付けることにしよう」 (155-32)

si のついたことばは，したがって，綽名になることが多い。

dang は hang の称号をもつ夫人への称号 [Zain 1954: 57]，宮中の高位の女性への称号 [Iskandar 1970] などとかなりあいまいである。編年史のなかの例もすくないが，Bija Wangsa がパサイ国王への手みやげとしてもっていったのは，金粉7テールのほか二人の奴婢 (sahaya) で，その名は *dang* Bunga「花」と *dang* Bibah「愛」といった(170-10～11)。*dang* Bibah をもらったパサイ国王の回教師 (makhdum) は，その奴婢の名を *dang* Lela Nidahari とかえた (173-4～5)。これらでみるかぎり，dang はあまり高貴の女性にもちいられたとはいえず，女官，侍女の称号とする [西村 1942: 205] のにも一理ある。なお，自称詞としてももちいられている。

Maka sahut pĕrĕmpuan itu: Nama hamba *dang* Raya Rani.「その女は答えて，私の名は Raya Raniです」 (236-02)

IV. 指示代名詞

現代語と同様，編年史にも二つの指示代名詞 ini「これ」，itu「それ・あれ」があらわれる。しかし現代語でもそうであるように，物理的にせよ心理的にせよ，空間内でのみこの二つが対立しているのではない。itu には定冠詞のような機能もある。itu の機能は談話のなかにおいて既知 (the well-known) あるいは定 (definite) という素性をあたえるということができる。それにたいし，不定 (nondefinite) はマークなしである。既知，定の場合，当然のことながら，「それ・あれ」といちいち訳す必要はない。

karĕna anak Mĕlayu tiada pĕrnah durhaka, dan jika kĕhĕndak yang lain gĕrangan, tahulah *patik itu* mĕmbalasnya. Adapun sĕkarang, jikalau ada karunia duli Yang Dipĕrtuan, *patik itu* minta bunuh juga.「(王にたいし) マライ人は二心を抱くことなどあり得ないので，ほかにも別の決意の仕方があるかもしれませんが，私は (王の死に) どうお答えすべきか分かっています。どうかいま閣下にお慈悲があれば，私は殉死を願い奉ります」 (305-05～07)

patik はすでに述べたように転用された人称代名詞である。ただし，W. では patik

ini [193] となっている。itu が人称代名詞につくことは ini にくらべて非常にすくないが，それは代名詞そのものがすでに談話のなかでの前方照応的 (anaphoric) な機能をおびているからである。itu はまた，文中の句としてのまとまりをしめすためにももちいられた。

daripada pandainya sĕgala utas bĕrbuat dia *itu* tiadalah kĕlihatan rapatannya lagi,「それ（城壁，dia）を造ったあらゆる職人の技術によって，継ぎ目はまったく見えなかった」 (020-13)

ただし，碑文のなかでは ini と対になっているのは inan であって itu はでてこない。そして inan がやはり定の働きをしていたことが，

savañakña yaṃ vuatña jāhat ... pulaṃ ka iya muaḥ yaṃ doṣāña vuatña jāhat *inan*,「あらゆる悪い行為は … そのような悪い行為によって罪のある人のところに再び戻ってくる（悪事に対して人は債務を負わなければならない）」 [Coedès 1930: 48]

のような例からわかる。inan はミナンカバウ語の関係代名詞 nan へとつながる。itu は *itu（タガログ語 itó「これ」; マラガシ語 itỳ「(目に見える) これ」），ini は *ini（タガログ語 d-ini「ここ」; マラガシ語 ìny「(目に見える) あれ」）に由来するが，音形はともかく意味についてはずれがいちじるしい。碑文マライ語にも itu がなかったとは断言できない。しかし，現代の ini: itu のような対立は，14世紀には確立していたことがトレンガヌ碑文（1303年，または1387年）によって判明する。

編年史において ini は，ほぼあらゆる人称代名詞にともなってあらわれる。ini をそえることによって話し手に心理的に近づけようとする（あるいは話し手が心理的に近づこうとする）のである。したがって，一人称にそえられた場合には，話し手と聞き手との間の境界が ini によっていっそう明確化される。

Bahwa aku *ini* bĕrmimpi rupanya, bukannya syaitan.「(この) 私は夢を見たようだが，決して悪魔の仕業ではない」 (081-31)

Sahaya *ini* hamba datuk.「これなる私は閣下の僕です」 (280-31)

Siapa ĕngkau *ini* dan siapa namanu,「ここにいる君は誰か，君の名前は何と言うのか」 (120-23)

Tahukah tuanhamba sĕkalian bahwa ia *ini* anak hamba?「あなたがた皆，私の膝にいる子（彼）が私の子であることを知っているか」 (104-02)

Bagaimana mĕmbuat dia *ini*?「この私に献上されたそれ（サゴ餅）はどうやって作るのか」 (140-06)

そして，ini は単独であらゆる人称代名詞のかわりとしてもちいることもできた。

Sĕmbahnya: *Ini* si Datang Baharu, *ini* si Datang Lama.「奏上して，こちらが「今来た君」，こちらが「もう来た君」」　(156-01)

itu が人称代名詞のかわりとなった例はない。（ただし itu は1959回，そのほか itulah は109回，itupun は242回もあるから，見落としがないとはいえないが。）これは itu が人称代名詞につきにくいこととも関係がある。

また，itu, ini が ia と合成形をつくって yaitu（6回），yakni（10回）となり，いずれも「すなわち」を意味して説明接続詞 (explanatory conjunction) に相当するものになる。ともに定式化してそのあいだの使用上の差はもはやあきらかでないが，究極的にはここにも定：不定の対立をみとめることが可能であると思う。

ini, itu はつぎのような副詞としての合成語，派生語をうみだす。

1. 様態の副詞

bĕgini「このように」，bĕgitu「そのように・あのように」は bagai「種類」と ini, itu が合成した語である。bagai はそのほか，mana「どこ」とともに bagaimana「いかに」，sĕ-「おなじ」とともに sĕbagai「として」のような単語もつくる。編年史に bĕgini は2回，bĕgitu も2回あらわれるが，碑文にはまったく見られない。

2. 場所の副詞

ini, itu は s-～sa-（<*ĕt'a「一，共」）と結合して sini「ここ」，situ「そこ」という派生語をうみだす。ただし，この副詞の系列にはもうひとつ，sana「あそこ」がくわわるが，sana の -na は碑文の i-na-n の -na- とも関連があると考えられる。ただし，碑文にはすでに sini, sana が見えている。碑文に situ がないのは，itu がないことと呼応する。編年史マライ語においてすでに，現代語とおなじ指示代名詞は2分型，場所の副詞は3分型であって並行しないが，吉田は，インドネシア語の場合，副詞のほうを基準にもちいて 3H（聞き手の空間中心）型に分類する [吉田 1981: 856]。

sini, situ, sana についてこれまでおこなわれているもっとも単純な説明は，sini を「近称 (tĕmpat ini)」，situ を「中称 (tĕmpat yang tak jauh)」，saua を「遠称 (tĕmpat yang jauh)」と定義することであろう [Poerwadarminta 1953]。sini, situ, sana を英語（吉田によれば2分型）の here, there, over there と対応させることもおこなわれる [Winstedt 1927: 135, Macdonald／Dardjowidjojo 1967: 200]。この定義では，触診をうけている自分の体の一部を「そこ (situ)」が痛いとい

え，日本からはるか遠くインドネシアの友人に電話をかけて「そちら (situ)」といえることの説明ができない。すでにのべたように（II.），時枝は代名詞を話し手と事柄との関係の概念的表現と定義したが，そのような定義にもとづいて彼は「こ・そ・あ」を「近・中・遠称」と規定した。これにたいし，阪倉は「こ」「そ」「あ」をそれぞれ，「話し手中心の円周内」「聞き手中心の円周内」「話し手および聞き手中心の円周内」にある [阪倉　1974: 156] とした。これはいっぽ進歩した見方といえる。柴田はさらに，話し手のつくる空間「こ」，話し相手のつくる空間「そ」，第三者のつくる空間「あ」は，「こ」と「そ」，「こ」と「あ」という対立をなし，それは「そこここ」「あれこれ」といった連結が可能なことからもわかるが，「そ」と「あ」とは組みあわないことをしめした [柴田　1979]。「こ」の空間と「そ」の空間，また「こ・そ」の空間と「あ」の空間とは重なりあう部分があり，この共通部分については，たとえば「こ」は「話し手と話し相手とがつくる空間」というように定義できるという。このような相関的解釈によれば，さきの例の「そこ」「そちら」の説明は可能になる。あるいは話し相手を「こちら」ともいえる理由がわかる。「あそこ」「あちら」は，話し手と聞き手（あるいは読み手）の両者のあいだに共通の話題，場が存在するとき，それに対立する方向，場ということになる。とくに距離の遠さは意味しない。「あなた(彼方)」が近世以降，二人称代名詞「あなた(貴方)」になったという例すらある。たとえとなりの人であっても，「あの」人とはもう口をきかない，という話題をすることもできる。書きことばにおいて，いわゆる「地の文」に「あ」があらわれにくいのは，書き手と読み手とが一体になって共通のなにかを話題にするような状況はあまり起こらないからである。

ところでマライ語の sini, situ, sana と日本語の「こ・そ・あ」とことなる点は，マライ語では相対的な距離関係をあらわすということである。sini は話し手に近いこと，situ は聞き手に近いこと，sana は話し手・聞き手から遠いこと。現代語ではこの関係におうじて，原則的に sini はaku; saya, situ は ĕngkau; kamu, sana は ia; dia を意味することもできる。しかしその組みあわせは，sini: situ, sini: sana であって situ と sana とは結びつかない。

> *Sini* sĕdah sĕtuju, tinggal *situ* bagaimana.「こちらは同意した，そちらはどう」[Poerwadarminta　1953]

また，sana sini「あちこち」のような連結が編年史 sana の 9 例中 4 例にあらわれる。

> Maka orang pun gĕmparlah bĕrlarian *sana sini*.「人びとは大騒ぎして，あちこち逃げ回った」　(127-29)

sini は11例，うち7例は sana sini, kĕ sana sini となる。前置詞 di をともなった di sana は26回，di sini は12回ある。しかし，編年史には (di) sini, (di) sana が単独で人称代名詞としてもちいられた例は見あたらない。

maka baginda pun bĕrangkatlah dari *sana*,「陛下はそこから出発された」(009-09)

maka didapati baginda tun Ali sĕdang ada *di sana*,「陛下によって丁度その（家）にいた Ali 殿はみつけられた」(211-34)

sana はこのように日本語で「そ」にあたることもあり，これが日本語で「あ」といえないのは，さきに述べたように，地の文にあるからである。したがって，

Apa kĕrja anak kita pĕrgi kĕ *sana*?「私の息子はそこへ行って何をしようとするのか」(037-11)

という会話文においては「あそこ」と読めないことはない。日本語で「あなた」は二人称に転用されるが，sana にはそれは不可能であって，sana はつねに第三者しかしめさない。ときに，それが敵方の意味にすらなるのは，やはり距離の遠さと関係があろう。

Hatinya sĕnantiasa bĕrpihak kĕ *sana*.「彼の心はずっと彼方を向いている」[楊　1962: 55]

sini「ここ」は問題がない。

Oleh dĕngan titah maka hamba bĕrani, karĕna ia durhaka kĕ bawah duli Yang Dipĕrtuan *sini*.「勅命によって私は敢えて（殺）したのです。彼はこちらの王のもとで謀反を起こそうとしたからです」(201-20)

編年史に situ は1回あるのみ，また di situ はない。

Maka dari *situ* tiada bĕrani orang mĕngĕluari dia.「そこ（ジャワ）から彼 (Sĕmĕrluki) を迎え撃てるような勇気のある人はいなかった」(166-02)

これは直前にジャワのことが言及されてあり，読み手の意識はまだすぐ近くのジャワにとどまっているからつづけて situ でうけたのである。しかし，このような例がわずか1例しかないのは，編年史が聞き手（読み手）に語りかける調子の内容と文体をもつのではなく，叙述調記述調であることと関連がある。

V. 関係代名詞

マライ語の関係代名詞 yang は *ia-ng>*iạ-ng「そ（れ）・の」に由来するが，こ

の *ia-ng は *ia-ng をへて古ジャワ語，タガログ語の定冠詞（主格・主題のマーカー）ang へといたっている。ところで関係代名詞，定冠詞といってもそれは便宜的な呼び名であって，もとはその語構成法「そ・の」からもあきらかなように，同格的 (appositional) な機能から発している。関係代名詞という名称そのものも，連結 (connective) とか接続 (conjunctive) とかいうほうが適切であろうし [イェスペルセン 1958: 86]，その関係代名詞ですら，現代英語で the man I saw. のようになしですませて，休止と述部 (Nebensatz) に強調をおくことによってそれにかえることもできる [Havers 1931: 23]。

碑文マライ語では関係代名詞的用法のほかに接続詞としての用法も一般的であった。

Savañakña *yaṃ* nitānaṃ di sini,「ここに植えてあるところのものすべては」[Coedès 1930: 39]

ḍapunta hiyaṃ marlapas dari mināṅa tāmvan mamāva *yaṃ* vala dualakṣa …「殿下はそれが二万の軍勢を率いて Minanga tamban（地名？）をお発ちになった …」[Coedès 1930: 34]

後者のような接続詞の用法はその後，14世紀のトレンガヌ碑文をへて編年史でもまだ旺盛であった。yang の総数は1008回とじつに多い。

ialah *yang* běroleh harta ini.「彼こそこの財を得るであろう」　(020-05)

Inilah *yang* kita lihat sĕmalam itu.「これこそ私たちが昨夜見たものだ」　(023-03)

Maka sang Nila Utama bĕrtanya pada sĕgala orang *yang* ada sĕrtanya itu.「Nila Utama はそれ（動物）と一緒にいたすべての人に尋ねた」　(039-34)

上の2例では yang をはぶいても文はなりたつ。yang について関係代名詞的機能はまったくないとし，むしろ「強調詞」(partikel pementing) と呼ぶほうがよい [Poedjawijatna 1964: 120] という説もある。最後の例も，線状的 (linear) に展開される発話に忠実であるならば，「すべての人に尋ねたが，彼等はそれと一緒にいたのだった」と読むほうが自然でもあろう。現代インドネシア語の口語的表現で yang が接続詞 bahwa「と」とおなじ機能でもちいられることがある。

Saya pun pĕrcaya *yang* adinda kasih juga akan kakanda.「私は弟が兄を愛していると信じる」[Poerwadarminta 1953]

このような現代の yang の使いかたに，接続詞的と関係代名詞的とを区別することはたやすいが，編年史あるいはそれ以前のマライ語において，その間を区別することはじつはかならずしも容易ではない。

Adapun nakoda Cĕmpa *yang* pilihan duduk di sĕri balai; maka sĕgala anak tuan-tuan *yang* bĕr-sahaja-sahaja duduk di sĕlasar balai.「抜擢されたチャム人艦長たちは謁見室に座った。そしてただの貴族の子弟たちは廊下に座った」 (085-04)

この例は W. では,

Adapun sĕgala nakoda Cĕmpa *yang* pilihan dan anak tuan-tuan *yang* duduk di sĕlasar balai itu. [85]

となっている。Brown は duduk の前にある yang をはずすべきだというが [Brown 1970: 217], たしかに関係代名詞ととれば不要にみえるけれども, 接続詞ととれば「艦長と子弟と, 彼等は座った」とつづけてゆけることになる。編年史の書かれたころは, yang をこのように接続詞的に使用して文を自由に展開してゆくことができたのである。またつぎのような用法も接続詞的ということができる。

yang istiadat raja Mĕlayu, apabila tiada bĕraja pĕrĕmpuan, anak bĕndaharalah akan jadi raja pĕrĕmpuan.「マライ王室の習慣では, 女王を欠いたときには宰相の息女が女王になることになっていた」(according to royal Malay custom, [Brown 1970: 153]) (278-11)

現代語で rumah bĕsar「大きい家」と rumah *yang* bĕsar「大きい(ところの)家」とは, 後者が *yang* によって対立 (contrast) をしめし「いくつかある家のなかでこれ(それ)が大きい」を意味する [Li 1976: 122] といわれる。*ja-ng は古ジャワ語, タガログ語の定冠詞 ang へと発展したが, そのような限定的機能はマライ語の yang にもとどめられていて, そのあらわれが対立あるいは対照 (tegenover) という機能として残っているのである。*yang* aku は「私なるもの, 私に関するかぎり」(ik voor mij, wat mij betreft, ik)」を, *yang* bapa は「(母と対立させた) 父 (de vader)」を意味する [Gonda 1943: 508]。このような名詞の前に yang をおいた対立の例は編年史には多い。

Ini si Lamat Lama, *yang* ini si Lamat Baharu.「こちらが旧 Lamat 君(くん), こちらが新 Lamat 君(くん)」 (156-07)

rakyat itu umpama akar, *yang* raja itu umpama pohon;「国民は根のようなもの, 王は幹のようなもの」 (186-32)

このような yang の限定性は, 現代語ではもはやそれと意識されていないかもしれないが, 名詞とむすばれる序助詞の前に yang がおかれるという現象にみとめられる。anak *yang* kĕ satu「第一子」。そして序助詞の例は編年史にもきわめて多い。

VI. おわりに

網羅的な KWIC データのおかげで，従来，印象的に考えられていた現代マライ語につながる17世紀マライ語の言語体系のうち，代名詞の実体とその用法について，かなりの点まであきらかになったかと思う。ただし，網羅的データであるだけに，著者のあるいは編纂者の方言的個人的なことばのバイアスが，まったくないとはいいきれない。その点については，できるだけ注意をはらってそれと区別したことが論のなかからみていただけると思う。さらに同時代ごろの文献を KWIC して調査するのが，「ラング」としてのマライ語をとらえるために理想的であることはいうまでもない。

碑文マライ語をうけついだ17世紀マライ語は，現代に近いとはいえ，また王制，侯主制下での内容であるためとくに敬語的表現がゆたかであることはべつにしても，現代のマライ語（マライシア語，インドネシア語）とはやはり微妙な差異のあることがあきらかになった。

現代語との関連でいうと，人称代名詞は ia が主格的，dia が斜格的という機能をまだ保持していたし，sahaya には語源意識がまだ残るいっぽうで，上位から下位にたいする aku にたいし，下位から上位への代名詞として区別してもちいられていた。現在，ia; dia はおろか，saya (sahaya): aku の使いわけも aku がインフォーマル，saya がフォーマルというようなゆるい現則でしかなくなっている。現代インドネシア語では，saya にかえて kami をいっそう上品な表現のために使う傾向がある [Badudu 1975: 100] といわれる。saya の謙譲性がさらにうすれてきたためであろう。17世紀には現在の対男性用の tuan が女性にたいしてももちいられていたことは，大きな相異であるが，現在の同位間の saudara (saudari は編年史にはない) は，まだ代名詞的でなく親族名称的にもちいられていた。マライシアの ĕncik，インドネシアの bapa(k) の用法は現在とほぼおなじとみてよい。ただし，女子の nyonya, nona などはインドネシア語がのちにジャワ語から吸収したのである。どちらかというと，マライシアにはまだ複雑な人称代名詞がみられ，インドネシアではかなり簡素化されてきている。いっぽうは侯主制を残し，たほうは共和制へと移行したせいもあろう。無論，これには意識面での変革がともなわなければならないことはいうまでもない。インドネシアの故大統領は Bung Karno と呼ばれたが，bung とは懇意な男友達への呼びかけ語であった。ただし，ジャワ人の世界には，このような簡素化が適用できない。それはジャワ語にとどめられている深刻な敬語表現とも関係がある。

親族名詞にともなって丁寧をあらわす前接辞の -nda そして一人称の senda は現

在すたれてしまったが，この -nda をともなった形が自称詞や自分の目下にたいしても使いえたということは，インドネシア語の丁寧な表現の形式が，人間関係に依存しつつ，いっぽうで丁寧さが要求されるコンテキストによってもきめられるという特色をもつことを意味する。それは現代語で，自分の子供にたいし putěra「令息」, putěri「令嬢」の使用が可能なことにもあらわれている。

指示代名詞，ini: itu には近：遠とともに，未述：既述のような時間的対立関係もあることを Winstedt がすでに指摘している [Winstedt 1927: 116]。ただし現在では，既知であっても ini をつかう傾向があること，それが西欧語の影響によるものらしい [Poerwadarminta 1967: 56] ことがいわれている。現代語の表現は西欧語によってほかにもかなり深刻な影響をうけている。ポリネシア諸語にも吉田がすでに言及しているように[吉田 1981: 928]，タヒティ語 (Thahitian) のほかサモア語，ハワイ語などで指示詞と時間との相関関係が存在する。オーストロネシア語族の東西においてこのような現象があるのは，原オーストロネシア語においてそのような傾向をすでに宿していたからだといえるであろう。

謝　辞

本研究は，昭和54・55年度共同研究「言語データの収集と整理」（研究代表者第三研究部江口一久助教授）からうまれたものである。『マライ編年史』のコンピュータ入力化にさいしては，第五研究部の杉田繁治助教授，技術室の滝山光男氏のお世話になった。記してあつくお礼を申しあげたい。

文　献

Abdullah
1952 *Sedjarah Melaju. Menurut terbitan Abdullah diselenggarakan kembali dan diberi anotasi oleh T. D. Situmorang dan Prof. Dr. A. Teeuw dengan bantuan Amal Hamzah.* Penerbit Djambatan. Djakarta／Amsterdam.

Alwi bin Sheikh Alhady
1962 *Malay Customs and Traditions.* Eastern Universities Press. Singapore.

Badudu, J. S.
1975 *Pelik-Pelik Bahasa Indonesia.* Pustaka Prima. Bandung.

Benveniste, É.
1974 *Problèmes de linguistique générale, II.* Gallimard.

Brown, C. C.
1970 *Sějarah Mělayu or Malay Annals with a new introduction by R. Roolvink.* Oxford University Press.

Casparis, J. G. de
1956 *Prasasti Indonesia, II.* Masa Baru. Bandung.

OEDÈS, G.
1930 Les inscriptions Malaises de śrīvijaya. *BEFEO* 30: 29–80.
DARDJOWIDJOJO, S.
1978 *Sentence Patterns of Indonesian.* The University Press of Hawaii.
FISCHER, J. L.
1964 Words for Self and Others in Some Japanese Families, *AA* (*Special Publication*) 66(6:2): 115–126.
FOKKER, A. A.
1938 *Wirāṭaparwa, opnieuw uitgegeven, vertaald en toegelicht, I.* Nederlandsche Boek- en Steendrukkerij. 's-Gravenhage.
フレエ, H.
1973 『誤用の文法』小林英夫訳 みすず書房。
GONDA, J.
1943 Indonesische relativa. *BKI* 102: 501–539.
GONDA, J.
1973 *Sanskrit in Indonesia.* International Academy of Indian Culture. New Delhi.
HAVERS, W.
1931 *Handbuch der erklärenden Syntax.* Carl Winters Universitätsbuchhandlung. Heidelberg.
HUMBOLDT, W. VON
1836 *Über die Kawi-Sprache auf der Insel Java, I.* Druckerei der Königlichen Akademie der Wissenschaften. Berlin.
ISKANDAR, T.
1970 *Kamus Dewan.* Dewan Bahasa dan Pustaka. Kuala Lumpur.
泉井久之助
1967 『言語の構造』紀伊国屋書店。
イェスペルセン, O.
1958 『文法の原理』半田一郎訳 岩波書店。
KÄHLER, H.
1965 *Grammatik der Bahasa Indonesia.* Otto Harrassowitz. Wiesbaden.
LI, C. S.
1976 *Essentials of Indonesian Grammar.* Pustaka Malindo Publications. Sydney.
LI, C. N./THOMPSON, S. A.
1976 Subject and Topic: A New Typology of Language. *Subject and Topic* (ed. by Charles N. Li): 457–489. Academic Press. New York/San Francisco/London.
MACDONALD, R. R./DARDJOWIDJOJO, S.
1967 *Indonesian Reference Grammar.* Georgetown University Press.
西村朝日太郎
1942 『馬来編年史研究』東亜研究所。
POEDJAWIJATNA, I. R./ZOETMULDER, P. J.
1964 *Tatabahasa Indonesia, I.* Obor. Djakarta.
POERWADARMINTA, W. J. S.
1953 *Kamus Umum Bahasa Indonesia.* Balai Pustaka. Djakarta.
POERWADARMINTA, W. J. S.
1967 *Bahasa Indonesia untuk Karang-Mengarang.* U. P. Indonesia. Jogja.
阪倉篤義
1974 『改稿日本文法の話』教育出版。
SHELLABEAR, W. G.
1975 *Sejarah Melayu.* Penerbitan Fajar Bakti. Kuala Lumpur.
柴田 武
1979 「ことばの意味を知ろう」『朝日新聞 (夕刊)』5月10日。
鈴木孝夫

1973 『ことばと文化』岩波書店。
武富正一
1942 『馬来語大辞典』旺文社。
時枝誠記
1978 『日本文法口語篇』岩波書店。
富沢寿勇
1981 「『スヂャラ・ムラユ』の構造——マライ王権神話研究試論——」『民族学研究』46(1): 55–79.
TURNER, R. L.
1973 *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages.* Oxford University Press.
WILKINSON, R. J.
1943 *A Malay-English Dictionary.* (Reprint) 大東亜出版。
WINSTEDT, R. O.
1927 *Malay Grammar.* Oxford University Press.
WINSTEDT, R. O.／BLAGDEN, C. O.
1930 *A Malay Reader.* Oxford University Press.
WINSTEDT, R. O.
1938 The Malay Annals or Sejarah Melayu. *JMBRAS* 16(3): 1–226.
WINSTEDT, R. O.
1969 *A History of Classical Malay Leterature.* Oxford University Press.
山崎知二／有永引人（編）
1956 『名詞・代名詞』白水社。
吉田集而
1981 「指示詞にみられる空間分割の類型とその普遍性」『国立民族学博物館研究報告』5(4): 833–950.
楊　凡
1962 『詞義辨析』翡翠文化基金会。雅城。
ZAIN, ST. MUHAMMAD
1954 *Djalan Bahasa Indonesia.* Dharma. Djakarta.